

私たちには

やり遂げる力が備わっている



2011年、困難を極めるエベレスト無酸素登山に挑戦。最も危険といわれるアイスフォール(氷河)を登る。この時は、悪天候のため登山を断念した



富士山の倍以上、標高8000級の山は、世界で合計14を数えます。スペインの登山家エドゥルネ・パサバンさんは2010年、女性初の全14座登山に成功しました。幼いころ、内気で

自分に自信が持てなかった彼女を変えたのは、14歳での「山」との出あいでした。そんなパサバンさんの人生観を、スペインの地とインターネット電話で結んで伺いました。



道の上ではなく

「デス・ゾーン(死の地帯)」
人間が生きていける環境ではない標高8000級の領域を、登山家たちはこう呼ぶ。
気温は平均マイナス35度。酸素は地上の3分の1のため、10回息を吸ってやっと一歩進む。頭はもうろうとして、体のさまざまな機能が正常に働かなくなる。そんな状態で、滑りやすい氷のルートを登る。体力のみならず精神的にも壮絶な戦いだ。

「初めから14座を目指していたわけではなかったんです。とにかく山が好きで、気が付くと登山に人生をかけてみたいと思うようになっていました」
大学卒業後、両親が経営していた会社で働くも、山への情熱が募り、登山に本腰を入れた。
1998年から8000級の山に挑戦し始め、登り続けていくうちに、14座という目標が見えてきた。

準備も含め、「一瞬一瞬の道のり」を楽しむと思えるようになっていけばいけない、と」
登山も人生も「道のりこそ重要」と語るパサバンさんの話を聞いて、明治の文豪・森鷗外が、小説『青年』の中で問い掛けた「いったい日本人は生きるということを知っているのだろうか」との言葉が思い浮かんだ。
「死と紙一重の生還でした。でも、大変であればあるほど、喜びと達成感は大きいです」



8000級全14座を女性で初制覇

登山家 エドゥルネ・パサバンさん

2004年、標高世界第2位「K2(8611級)」を登頂

池田SGI会長は、テンジン・ノルゲイ氏(人類初のエベレスト登山を成し遂げたヒラリー卿の案内人)の「山には友情がある。山ほど人間と人間を結びつけるものはない」との言葉を紹介しつつ、次のように語る。
「世界の指導者よ、ネパールに来れ! 『天に一番近い国』で、下界の塵を払い、高き大きな境涯で、人類全体を行くえを考へようではないか」
インターネット電話の画面には、SGI会長の言葉に真剣な面持ちで聞いているパサバンさんが映る。彼女は登山のたびに感じたことを打ち明けてくれた。「確かに山は人々に、良き人」になるチャンスを与えること

皆が良き人である!

誰にも「自分の山」があるはず。生きる意味を見いだし、奮起させてくれる目標が!

「まるで、『15座目』を登頂したかのようでした。うつ病の克服は、最も大変な山でした」
8座目を踏破した2005年、パサバンさんは活動を休止した。今までの歩みが無意味だと感じるようになり、徒労感と孤独感に心を蝕まれたからだ。「全てに自信が持てなくな

自身の「最高峰」を探求

全14座の制覇は、パサバンさんにとって二つの意味で大きな節目となった。一つは登山家として、もう一つは、4年間闘い続けたうつ病を乗り越えたことだ。

「死と紙一重の生還でした。でも、大変であればあるほど、喜びと達成感は大きいです」

「山は、私たちが持っている最高の自分を引き出してくれます」
エピソードは、数え切れないという。険しい山道で疲れ果てていた時、仲間が貴重な食料を分け与えてくれたこと。登山を諦めかけた時、仲間の励ましに背中を押されたこと……。
「山は、私たちが持っている最高の自分を引き出してくれます」
大自然の魅力を多くの人に感じてほしいと11年、旅行代理店を設立。地元スペイン・バスク地方の自然や食文化を紹介し、ピレネー山脈を中心にスキーやカヤックなどのスポーツを堪能できる、さまざまなツアーを企画している。

「実は来年、エベレストに戻り、再び『無酸素登山』に挑戦する計画です」
パサバンさんは生涯、「自分の山」を登り続ける――。



「生きる意味を見いだし、奮起させてくれる目標として、一人一人の人生にも『8000級の山』があるはず」
例えば、「ずっと夢だった小説家になること」「家族が最高の人生を歩むために仕事に励むこと」など、それぞれ内容は異なるが、その人にとって「自分の山」は必ず存在する。そして、重要なことは、その「山」を登り切れると確信することだ、と。

Edurne Pasaban スペイン・バスク自治州生まれ。大学で経営工学の学士号と人的資源管理の修士号を取得。2011年、スペイン王妃が主催する「スポーツ国民栄誉賞」で、最も活躍した女性スポーツ選手に選ばれた。現在はマドリードのビジネススクールで助教授を務め、旅行代理店を経営するなど、多方面で活躍。

取材を終えて

インタビューの中で、「親しい日本人の友達はいませんか?」と聞いてみた。意外にも「いない」との返事。短い沈黙を経て、バツと何かひらめいたように「あなたよ。私の最初の日本人の友達あなた!」。包み込むような優しい笑顔と共に、山を愛する「良き人」の温かな声が幾重にも心にこだました。